



第39回 医家写真展を回顧

“チエンジ”の年でした

会場・作品のサイズ・配置など

銀座・鳩居屋、さらに東京交通会館内へと長年の会場であった京セラ・コンタックサロンから離れて、新会場で催された「医家写真展」は、初参加の5人を含む22人から41点が出展された。この中から最優秀作品に新井隆彦先生の「飛行機雲」が選ばれ、懇親会の席上で他の賞と併せて表彰状が竹腰部長から手渡された。なお今回も作占紹介を兼ねての寸評を、新井先生から以下のように寄せてもらった。

評 新井隆彦

恒例の医家芸術クラブ写真展ですが、今回は色々な意味で変わりました。先ず御承知の通り有楽町の東京交通会館・コンタックスサロンでの写真展を実行することが今回より出来なくなりました。写真業界の大きな変化にも依るわけですが、当クラブの写真展も開催が不可能の状態となりました。このため竹腰 岩瀬 雨

宮受委員の方々が文字通り東西奔走され、ようやく会場が見つかり十一月十九日より二十五日まで新宿の「HCLフォトギャラリー 新宿御苑」で開催することが出来ました。

この間、委員の方のご苦労は大変なものであったと伺っております。ついですが私、新井隆彦は体調不振により昨年をもって委員を辞任致しましたが、写真評は是非と言われましたので、今年も紙

面を汚すことになりました。失礼の段有るかと存じますがお許し下さい

さて新しい会場は名称の通り新宿御苑のすぐ近くで交通の便もさほど悪くありません。しかし何分にも会場が従来に比べて狭いものですから必然的に写真の大きさ、枚数、配置など昨年までとは異なります。展示写真の大きさも半切に致しました。また配置も一つの部屋に纏めました。考えようによってはこぢんまりしていて移動しないで全作品を見る事が出来るわけです。

さて十一月十九日の午前は、平日ですから当然医療関係者が会場にお出でになるのは至難なことです。私は開会直後に参りましたが、一般の熱心な方だけがお見えでした。

それでは例年の通り出展者の作品を私独断の批評で述べてみます。今回は2点展示された方も私の独断で写真掲載は一人一点(*印)にさせて頂きました。

作品は先ず部屋に入って直ぐの壁面に

ら氏名のアイウエオ順に写真が展示されておりました。

先ず私、新井隆彦の写真です。「屋根のコウノトリ」と、四方八方に整然と並んでいる「*飛行機雲(セー又川)」。「数年来歩行が困難の為、今年の春もセー又リパークルーズ十日間、船上で撮したものです。特に空一杯広がる格子模様の飛行機雲は、晴れた北欧でこそ見ることが出来たと思います。

岩瀬 光先生の作品は「若葉の輝き」「*寺院と中央火口」でした。とも



飛行機雲(セー又川)

新井 隆彦

に岩瀬先生の得意の広角レンズ使用による傑作です。若葉の輝きは文字通り若葉の林を省略することなくレンズを絞り切つて鮮明に写されており、またそのため奥深いところで風に揺られているのが見え一際新鮮さを感じました。

またエーゲ海の「寺院と中央火口」の作品は、深い青色の海岸で空には何とも言えない美しい雲が所々に掛かり、広角



寺院と中央火口 岩瀬 光

の効果は遺憾なく撮されておりす。

大武秋笙先生 先生は2枚とも奥多摩のものですが、緑の山に真っ赤に塗られた橋が新鮮な色合いを大胆に撮されました。もう一枚はドラム缶橋として有名な「*新緑の奥多摩」で、緩やかなカーブを描いた質素な橋の手前に木の枝を配したのが成功していました。静かな湖面の情景が映えています。



新緑の奥多摩 大武 秋笙

大武省三先生 大武秋笙先生の弟さんですが特に花の写真で優れており今回も真紅な花のアップ「*睦み」が出されました。例の通り単に花の撮影ではなく花の生命を映し出しております。暗いバックに新鮮な赤の花、そして生き生きとした緑の葉、総てが日本間に飾りたい写真です。



睦み 大武 省三

もう一点の「家路」は雲の切れ間から太陽が海上を照らしその光の間を帰り船が通り抜けて行きます。花は静、帰り船は動の写真です。



早苗田 大森 佐一郎

大森佐一郎先生 「*早苗田」は何にも田植え直後の風景らしく広い田の水面にまだ頼りない苗が並んで風にそよいでいます。何気ない風景ですが恐らく

都会から行った人には気づかない風景でしょう。それは地元の方が愛情を持って毎日田圃を見ておられるから親しみのある風景になったのと思います。

もう一点の「背伸びする春」は面白い角度で生え出た花を撮られました。通常では思いつかない様な狙いです。お陰で首を長くしているかの様に春の到来を待っている雰囲気良くあらわされています。

木村典子先生 2点とも英国の湖水地方の作品です。私自身がこの地方のペンションなどに宿泊して朝夕撮影出来たらと考えておりますので、実行された先生の幸せが溢れています。勿論沢山の写真を撮られたと思いますが、特に湖水の色が深く、且つ草むらに羊が点々という「*湖水地方」の方が美しく良い作品と思います。

この地に泊まったらどちらを向いても絵になりますが、うっかりすると場所の良さに感激の余り、撮影そのものに工夫



湖水地方 木村 典子

夫を忘れてしまっということがあります。

斉藤三朗先生 「*マガモ紅葉狩」一点が提出されました。静かな池でしょうが、秋の雰囲気が旨く表されております。どうも主役は見事な紅葉の様に感じられます。惜しみなく紅葉の良さを感じさせられます。

勿論もう一つの主役マガモが頑張っ



マガモも紅葉狩 斉藤 三朗

おりますが、矢張り上からの狙いで、こちらの主役が遠慮してしまいました。この角度では止む得ないと思いますが、マガモがもう少し横を向いてもらえると更に綺麗な写真になったでしょう。落ち葉と水面に、軟らかく当たっている紅葉光も、素晴らしい深みのある作品です。



バルト海 夕景 佐々木 正

佐々木正先生 「女王」と「バルト海夕景」の作頭が提示されました。「女王」は佐々木先生好みの美しい写真ですが良くある単に白鳥がいるだけの風景ではなく、よく見ると水藻の池で白鳥が前に進んでいるのが判ります。シャッター時間とタイミングが風景を超えてものになりました。*バルト海夕景」の写真是

強烈なまでに美しい夕焼けの海岸風景です。空が真っ赤に染まり海の手前にやや暗い海岸の家々が見えます。バルト海でのクルージングでの撮影でしょうか。平和と争乱が同居している東欧の一齣です。



残照 佐久間 文子

佐久間文子先生 「*残照」と「トレニア」の2点です。残照はどこか日本の田舎での景色でしょうか。遠いお寺の

鐘が鳴る、鳥が鳴くから帰りましょう、と子供の歌が聞こえてくるようです。情緒深い景色ですが、下の暗い部分をもっと少し詰めて、残照の部分を強調した方が良かったかも知れません。また風景写真で電柱などは可及的に避けた方が賢明です。

私はトレニアという花は存じませんが良い色に出ています。折角ですから総ての花にピントが合っていれば、尚良い写真になったでしょう。

白矢勝一先生 「亡びの美」と「楽しいひと時」の2点です。前者はどのような情景で撮影されたか判りませんが、何れにしても理解しがたい様なマスコミの被写体に埋もれた美を表現されたのかと想像するばかりです。

「*楽しいひと時」はどこか外国のレストラン前の様です。店の前には外で待っているワンチャンがいます。ネオンが明るくとても良い想い出になるでしょう。ただ下の横断歩道は入れなかった方が纏



楽しいひと時 白矢 勝一

まるのでは。

白矢泰三先生 「あなた誰」「優雅なお昼寝」の2点です。どちらにも身近な猫ちゃんです。「あなた誰」は動物の本能に基づき不審なものには疑いの目を向けます。そこには少しの妥協もありません。
 ＊「優雅なお昼寝」は、「転じて安心の世界にいる猫ちゃんです。手も足も伸ば



優雅なお昼寝 白矢 泰三

して腹巻きをしたお腹も伸び放題です。何も疑う必要も無く正に幸せにどっぷり浸かっている微笑ましい作品です。特に家族に愛情が感じられます。

白矢智靖先生 「マネキンの見る広告塔」「空を見上げて」が展示されています。青空に大きな広告塔が立っています。アメリカ力辺りの都市での撮影された



空を見上げて 白矢 智靖

ものでしょうか。戦争もマネモ関係無い地方都市の一齣です。広告塔は判るのですがそれを見ているマネキンがどつも私には判りません。マネキンに意味があるなら写真の中で力強く表現されたら面白い作品になったとおもいます。

＊「空を見上げて」も同じ場所での撮影されたものと思いますが一寸方角を替える

と画面の雰囲気は全く変わります。こちらは子供が何を上向いて見ているかは判りませんが、何か物語が隠れています。何を見ているのか続きを見たくありません。

関口直男先生 「*水遊び」「夕夏」の2点です。前者は「公園の林に囲まれて噴水が勢いよく水を噴き上げており、周りに子供が水をかぶって遊んでいます。誰にも文句や注意を言われない、まさに子供だけの世界です。」「夕夏」は日本の風景の中で日が沈むころです。空には適

当な雲がありフィルターの役目をして太陽が綺麗に表現されました。暑かった夏に絞り、光も良い「*早暁」が全体として纏まって作品に素晴らしいと思いました。

高橋俊一先生 2点とも山の写真です。登山に縁のない私にとっては、写真の価値よりもここまで登るのでは、とても重労働なことと、受け止めています。どちらも山頂を望んで天気も良く今日の成功を祝福しているかのようです。

個人的には一つの山に絞り、光も良い「*早暁」が全体として纏まって作品に素晴らしいと思いました。

鷹橋靖幸先生 「光の芸術」「紫陽花」が出版されました。*光の芸術は「イルミネーション」の動きの中で丁度適当な時間で切り取った、写真な



早暁 高橋 俊一

らでは表現できない作品で、写真歴の豊かさが偲はれます。どこまで入れる構図か、またシャッター時間はと、ご苦労様でした。

「紫陽花」は丁度見頃な紫陽花を真つ正面から取り上げられました。梅雨の晴れ間ですがどこことなくしっかりと感が程良



水遊び 関口 直男



光の芸術 鷹橋 靖幸

く表現されてきました。

竹腰昌明先生 「波の音」「アラモアナタ景」の2点でした。「*波の音」は写真展の案内葉書に使われましたので皆様御承知かと思えます。荒々しい岩場に日焼けした若い女性が思いきって伸びをしています。やらせではなく自然の光景だそうです。非常に鮮明で特に岩の表面

の質感が良く出ています。

「アラモアナタ景」は広く波静かな海岸で日没を迎えました。空は快晴でちぎれ雲の間から大きな太陽が見えています。手前の海岸には椰子の林が見えて画面を安定させています。



浪の音 竹腰 昌明

秋」です。前者は天下の絶景鳴子の秋景

逸見和雄先生 「鳴子峡」と「*晩



晩 秋 逸見 和雄

色です。画面一杯に紅葉の林を主とした景色が広がり空に向かって遙かに橋が見えます。温泉にでも入りながらこの天下の絶景を眺めるのも日本ならではの楽しみです。後者は山の尾根伝いに一人林の中に消えて行きます。気候も良く静かな山の中を一人歩くのは大変に贅沢な事です。私個人的には物語のある晩秋が良か

ったと思います。

本村美雄先生 目下写真道にはまり込んでいる先生です。なににも恐れず写真に突入しています。その様な訳で時々驚くほどの傑作を物にされます。今回は「*寒緋桜とメジロ」「カモメ」の2点でした。前者は一面の淡い桜色をバックに見事なメジロが一羽見えます、ピ



寒緋桜とメジロ 本村 美雄

ンも良くまるで有名画家の絵かと思つほどです。やはり数を多く撮影されている事が傑作を生み出す源流なのでしょう。後者は「カモメ」でロープに一列に並んだカモメの集団です。面白い狙いですが手前から向こうに向かっての鳥の集まりは何処までピントを合わせ得るか判断に迷います。



田園アート 三上 忠英

三上忠英先生 「*田園アート」以前にも何回か出されたモチーフですが、市役所の五階から何方でも撮影出来るそうです。予め設定されている撮影でも天気、時間、画角、自分の高さ又当然田園に描かれたもの(絵)にもより決して同じ写真は撮れません。今回はそれらの総ての条件が揃い成功しました。知らない方が見たらどのようにして撮影されたのか質問されるでしょう。タネを明かせばなる程と思われるでしょうがどんなに設定が良くてもこの様に傑作になるとは限りません。

村上 泰先生 「*紅花カルミア」と「古都のモタニズム」の2点が展示されました。私は花が美しいのは判りますが花の名前については全く存じません。ただこの花の写真について申しますと明るく清楚な感じが致しました。枝振りも面白いと思います。ただ撮影するとなると難しくそうですね。

「古都のモタニズム」の方はフランスの

古都デイズンでの撮影のことで、非常に新鮮で芸術的だと思いませんが正直の所、題名の通りモダンな内容の写真で私はどのよつに判断して良いか迷っております。何れにしても各自が美しい或いは新鮮で面白いと感じられれば良いのではないのでしょうか。



紅花カルミア 村上 泰

鹿舞 矢崎 定造



矢崎定造先生 お祭り写真の大家です。今回は「*鹿舞」と「鬼剣士の舞」(本弓の表紙)を出されました。鹿舞いは街角での踊りで町の中での踊りのステップです。「鬼剣士の舞」は正に踊りの教科書の様に完璧な踊りをものにしておられます。申し分のない満点の作品です。ただ何時も感じますのはお仕事を休んで祭りを撮影する為、全国を飛び回っておりますが都会からいきなり現地に飛んでいって、あのように最高の場所に陣取り、最高のチャンス撮られる秘訣は何

表紙の言葉

矢崎 定造

(甲府中央)

写真は岩手県に伝承するシンシ踊りで「一人立獅子」とも呼ばれ、その芸能は獅子舞とは区別されていて、関東地方が宝庫、特に埼玉県や群馬県に多く伝承されています。岩手県で伝承されているシンシ踊りは太鼓系獅子と幕踊系獅子の2種類のみで、この2種類の芸能は伊達領と南部領の藩境によって伝承地が区分されているのも特色であり、藩境のまわりに他領に伝承していた種類のシンシ踊りが境を越えて伝承していません。この写真は「北上・みちのく芸能まつり」の二こまの幕踊系獅子を、大勢の観衆の中を分け入り、ISO感度を3200に設定し、撮影した写真であり、何時までも心に残る写真です。

でしょうか。ただ驚きばかりです。

山崎律子先生 「* サバンナの親子象」サバンナの親子キリン」の2点です。キリンの方は敢えて下を切り詰めて広いサバンナを表現しております。象の親子は画面にそれぞれが巨く収まり微笑ましい写真になりました。サバンナの撮影は兎に角動物を探す為に待つ事から始まり



サバンナの親子象 山崎 律子

ます。私が以前にお話した先生は、自分で車を手配して自家製の三脚にカメラを乗せて何日でも車の中で待つのだそう、我ながら安直に動物を撮して冷や汗ものでした。

カメラ紀行 矢崎 定造

私は慈恵医大卒（S 26）後、1年間のインターンを経て、大学の耳鼻咽喉科に入局致しました。学生時代より耳鼻咽喉科を志しておりましたので、すんなりと入局する事ができました。

入局した頃から、壁紙に筆またはマジックペンにて書いて表示していた時代は終わり、スライドにて学会発表の時代になっておりました。私は入局1年先輩の指導のもとに、スライド係りを命じられました。

今迄余りカメラに触れていなかった私でしたが、スライドを作るようになってからカメラに興味を持つようになり、すべての仕事が終わったあとの自由時間を

利用、医局員の依頼を受けてスライドを作成するようになりました。

写真を写す事は割合難しくありませんでしたが、現像にはかなりの工夫を要した記憶があり、特に大変だったのは、学会1週間位前から当直を残してすべての医局員が帰宅してからのスライド作りで、帰宅が深夜に及ぶ事が毎日のよう、時には医局に当直医と一緒に寝泊まりする事がありました。

このようにカメラに触れる下地があり、当時晩年になって、暇さえあれば日本中の祭りを中心に、カメラを持ち歩く自分の姿を想像する事は出来ませんでした。昭和35年、現在地に耳鼻咽喉科を開業してより、数年を経て甲府市医師会の理事に選出された頃、当時の甲府市の医師会長の篠原先生の発案で、医師会の会員家族及び会員の医療機関に勤務する従業員の仕事品を展示出来る文化芸術祭を立ち上げました。

私も委員の中に加わっております。

で、なにか出品しなければと考えたのですが、特に優れたものがなく、思い付いたのが、約2、3ヶ月前の休日(日)に家族と共に訪れた、甲府市北部に位置する千代田湖の西側の山に沈む太陽を湖面に入れて、何気なく撮影したものでした。

当時の一眼レフカメラは、今のカメラのように全自動で写せるものではなくマニュアルで絞りを決めて、シャッター速度は、表示の中間点になるように調節し撮影したところ、期待以上の作品となり提出する事が出来ました。この写真は好評を得、その当時の私の写真技術ではまた同じような写真をもつて一度撮って欲しいと言われても不可能なほど出来の良いい写真でありました。

これを機会に、休日となれば、家内と連れ立ってカメラを片手に被写体となれるものは何でも写してまいりました。家内は最初のうちは、私のカメラ助手をしておりましたが、助手ではあきたらなくて、私の使い古したカメラを駆使して写

真を撮るようになりました。

しかし、当時は一日中診療していたものですから、早朝撮影し、自宅に帰ってから診療というのは、身体が続かない事を考え、テーマは最終的には祭りを選ぶ事にしました。祭りは多少の時間のずれがあっても、スケジュールに従って進行するので、時間に制約される私にとって、祭りの写真はもつとも都合の良い撮影テーマと考えて、専念するようになりました。

更に祭りの催行日が休日である事が、不要不可欠の条件で、撮りに行きたい祭りがあっても、休日に行きたくないものは心ならずも除外しました。祭りの被写体は動きのあるものである事から、瞬間を写したさうと思ひ、若い時には、待つて写し、やり過ぎとしては追いかけて祭りの先頭に立ち、写すようにしておりましたが、老齢になった今では、待ち伏せ専門となり、バックの良いところを選び、其処で祭りの行列が過ぎるまで、シャッ

ターを押し続ける方法を試みております。祭りの写真を撮り始めてより、20数年がたち、この間、数回地元で祭りだけの写真展を行い、見て頂いた方々より好評を得ました。祭りの写真の撮影は東北の四大祭りを含めて数多く撮り歩き、次第に県、市その他の写真コンテストに入選するようになりました。かなりの量の祭りの写真が出来上がったから、周囲より写真集を作るよう勧められました。資料の収集と経費の面でも大変な負担とは思いましたが、一念発起で「祭りは踊る」の写真集を完成させました。

作り終わった時はその達成感ではばらくは放心状態でありました。祭りの写真を撮る事によって、その地域住民の取り組み如何によってその成功が左右されることを知りました。祭り関係者だけの盛り上がりでは、祭りは成功であったとはいえず、子々孫々まで続けて行くには同じ行事の模倣であつてはならないと思われまふ。

われませす。

次々と新しい構想を生み出し、地域住民の直接間接にかかわらず、総力を挙げて祭りの行事に参加する事が必要であると感して参りました。地域の人々が進んで参加出来る雰囲気が生じてくれば、活性化に繋がり大勢の観光客を呼び込む事が出来ると思います。

現在は朝日新聞社の全日本写真連盟関東本部副委員長として、地域の写真文化発展のささやかなお手伝いをさせていただいております。

出品に寄せて 大森佐一郎

本年の写真展に出品した二点は現在生活する住まいの近くの小景です。二十七年間続けた開業医生活にすっかり疲れは果てて逃げるように大阪を離れました。身体的には勿論の事、精神的な疲労感は限界に達しつつあるほど蓄積しておりました。情性で続けることさえ不可能ではないかと感じられました。

厳冬の二月 北海道に転居いたしました。雪の下に埋もれてしまいそうな小さな家は原生林の中にあります。ブリザードが吹き荒れる夜には裸樹とともに一晩中揺れます。

嵐が去り、重い雪雲の中から陽光が現れると雪面が光り輝きます。屋根の雪は雪崩れるように屋根を滑り落ちます。落雪の音は雷鳴のように室内に鳴り響きます。吹き荒れた北西風が残した雪面の風紋にはキタキツネやウサギの足跡が走ります。

丘陵に上があれば、石狩平野が眺望されます。そのなかを石狩川が悠々と流れ沈む西日に光ります。積丹半島は黒々とした山塊となり、日本海に突き出ています。

深い霧の朝が続くころには、ようやく道の雪も消え始めます。外気温はまだまだ零度を越えることはなく、しばらく外にいと手は凍えます。大阪では経験の

ない春の寒さです。

春の気配をはっきりと感じ始めるのは四月も下旬を過ぎる頃ではないでしょうか。黒い地面から「クロツカス」が咲き始めます。けなげにも、逞しく見えるその姿を見ると、感動します。

絨毯のように散り敷いていた秋の枯葉が、雪の下で一冬を過ごし土とならうとするその間から、いかに頼りなげな細い茎を伸ばして、思いのほか大きな紫の花弁を持ち上げます。

ゆっくりと裸樹に春の芽吹きが始まる頃、雪どけの透明な水が水路を走り始めると、フキノトウは姿をあらわします。瞬く間に成長する草丈は春の日に向かい「背伸び」をしているように見えます。

冬の間、骨だけ残されていたビニールハウスに、ビニールが張られると、春の農作業の幕開けです。雪面は広々とどこまでも広がります。そのビニールハウスが点在して、中では作業が始められて

います。名残の雪を残しながら、黒い田が現われます。すると、ある朝、水の張られた田に早苗が細いつす緑の葉を揺らす光景が広がっています。人の気配を感じなかった広大な水田は、ある朝「早苗田」に変わっているわけです。

北の国の四季の変化は鮮やかです。本のページをめくるように、回り舞台が回るように、突然に訪れます。この透明な美しく烈しい四季を身近に感じて過しながら、ようやく疲れが消えつつあります。

開業医の生活に疲れていたせいではなかったのかも知れません。都市に疲れていたのでしょうか。いや、都市という環境に生活する私の中の、都市的なもの、絶えず自己主張し続けねばすまない）に疲れていたのかも知れません。

これからは、北の国の生活を写真に表現して発表できねばと考へております。

和気藹々と高度な技術を伝えあう

懇親会

懇親会は11月23日(祝)午後、近くの日本食店「膳」で、ランチタイム貸切りで開きました。参加は出品者22人のうち10人とご夫人が3人、新入会員の石山先生、さらに洋楽部秋野仁志先生、美術部安田修一先生と和子夫人、堀内カラ―清水課長、事務局から西田明子の合わせて19人です。

先ず写真展会場に集合し、懇親会会場



竹腰部長から賞状を受ける新井先生◎

へ移動。やや体調不良な新井隆彦先生は他の部員のご迷惑になつてはと少し早く会場を出られる。一団の到着時には先着していた新井先生と竹腰部長ががっちり握手。

さっそく、次頁の別表のように最優秀作品の新井先生ほか、優秀作品の諸先生をはじめ、今回新しく設けられた技能賞や構図賞などの表彰状が竹腰先生から手渡されました。

カメラは本当に奥が深い趣味

その後、写真展に出品された美術部部長の白矢勝一先生のご好意で、個人所有のノートパソコンとプロジェクターを拝借。お陰様で、出品作品のみならず、裏書き落した作品も含めて壁面に投影しながら皆さんで鑑賞。自己紹介がてら、一人ずつ作品を解説。撮影秘話、苦労話をこ

披露願いました。

老若男女、写真撮影の趣旨は異なるに
もかかわらず、医家写真展を接点に仲良
く交流、「他者の良いところを褒め、認

< 各賞リスト > *は懇親会出席者

最優秀賞 *新井隆彦

優秀賞 *斉藤三朗、*佐々木正、高橋俊一、*竹腰昌明

APS賞 関口直男

お祭り賞 *矢崎定造

技能賞 *岩瀬光、大森佐一郎

構図賞 大武省三、木村典子、鷹橋靖幸、逸見和雄、村上泰

*本村美雄、白矢勝一

田んぼアート賞 *三上忠英

ナチュラルアート賞 *大武秋彦

新人賞 白矢泰三(弟)、白矢智靖(子)、*佐久間文子、山崎律子

め合う。和を最優先する」写真部の伝統
が、根づいているからでしょう。本村美

雄先生が佐々木正先生の助言に対して、
話された通り「大先輩が(長年苦勞して
編み出した)コツや技を惜しげもなくこ
教授下さる」と、優劣競争や批判がなく
「これはどう撮ったの」「そっぴい風に
したんだ」「素晴らしいね」「こうした
らもっといいかもしれない」等の関連な
発言が笑いととも飛び交い、和やかな
中にも、よりよい技術や撮影方法の意見
交換が行われながら進行了ました。

和やかなだけでなく、審直を担当して
いただいた堀内カラー清水課長も舌を巻

ここにちは・ひつじ

石井光子

暫くのブランクを経て再人会させ
て頂きます。心が癒される自然の風
景、美しい景観を切り取って行きた
いと思います。(眼科)

くほど、「素人と思えない力量の方が多
い」と驚いていました。

写真部はきつちり申込締切日や出品料
振込日が遵守されます。これも竹腰部長
雨宮・岩瀬副部長を中心に統制が取れて
いる証。今回は未出品でしたが、大雨の
冷え込んだ初日に雨宮副部長が来場、有
難うございました。

デジタルカメラの開発・普及で、参入
障壁はシャッターを押すだけと低いカメ
ラ。しかし、この道具をいつ、どこで、
どう使いこなす、作品として仕上げ、楽
しむか……カメラというメカが好き、構
図に趣向を凝らす、光と影の妙を楽しむ、
風景・山・花・鳥など撮影対象をよく観
察・研究し、その特徴の最良の瞬間を捉
える、旅行やイベントの記録として撮影
する……人それぞれ取り組み方、楽しみ
方も多種多様です。

家族や他の部との繋がりへ

今回の懇親会は是非お連れ様もとお願い



(敬称略・前列左から)岩瀬 光、矢崎定造、竹腰昌明、新井隆彦、斉藤三朗
 (中列)大武しな、石山英一、矢崎佳子、安田和子、安田修一、三上忠英、大武秋笙
 (後列)萩野仁志、佐々木正、本村美雄、本村香都子、佐久間文子

いしました。大武秋笙先生としな様、本村先生と香都子様、矢崎先生と佳子様のご夫妻で参加。お蔭様で会場が華やきましました。

また奥様のお話から意外な先生の一面も発見する一幕も。

他の部との交流の一端として、洋楽部元リーダー萩野昭二先生のご息仁志先生、絵画を美術展に出品されている安田修一先生と和子様ご夫妻横浜から足を運んでくださり有難うございました。

当クラブ会員はすべての部に参加可能

です。計画中の本年度の美術展で、萩野先生他のミニコンサートに他部の方々もお越し頂けたら嬉しい限りです。今後徐々にご家族をはじめ、横の部の繋がりや交流が進むといいなと思います。新入会の石山先生も法事を端折って、作品アータをご持参頂きましたので皆様と鑑賞させて頂きました。流石、竹腰部長ご推薦者だけあって素晴らしい作品でした。本年の秋の写真展のご出品をお待ちしております。

最後に私へ慰労のお言葉と記念品を頂戴しました。このようなお心遣いに感謝感激致しました。特に竹腰先生の奥さまお手製の小袋は綺麗な絹の布で丁寧な縫製が施され、もったいなくて使用出来ず、今も眺め、手にするとあの時の感動が甦ります。

連休の最終日にわざわざご参加頂きました皆様、お陰様で無事に懇親会を終了できました。心より「本当に有難うございました」。(文責・西田 明子)